

## 第二十八章 小春日和

人生には不思議に慶事が重なったり、悲運が次々と訪れたりする時期がある。大平の生涯もその例に洩れなかつたが、大福体制の成立によって党幹事長に就任してからは、身辺に明るい話題が相次いだ。

まず昭和五十一年暮には、新居が完成した。世田谷区瀬田の大平邸は、昭和四十九年一月に火事で焼失し、以来、大平家は最寄りの森村邸に借家住いを続けていたが、旧邸が建て直されたのである。この機会に、庭の一部を削って二男裕・公子夫妻の家も出来上がり、また、ただ一人独身で気がかりであった三男明も、五十二年の五月には、参議院議員の上原正吉の孫娘吉子との縁談が整い、秋には挙式することになった。こうして大平の身辺には家庭的な安定と充実が目立った。

つぎに、参議院選挙後の第八十一回臨時国会は七月二十七日に召集されたが、大平は、衆議院で勤続二十五年を迎え、永年在職議員として表彰された。福田首相を含む九人の表彰議員のほとんどが、昭和二十七年十月一日、独立後初の第二十五回総選挙で初当選してから連続当選を果たしてきた同期生たちであり、激動と復興の四半世紀を生きぬいてきた人々であった。本会議における表彰式の後に、保利衆議院議長の祝福を受けるため議長サロンで記念写真が撮られたが、保利議長、福田首相夫妻、大平幹事長夫妻の集まった姿は大福体制の主役が一堂に揃った感じであった。

そして、この頃には、すでに大平は、次期総理・総裁に擬せられており、その言動は毎日のようにマスコミで報道されていた。大平の人生には陽光がさんさんと降り注ぎ、不安の翳りは何一つないように見えた。

さらに八月上旬、大平はお国入りをした。参議院選挙に自分の秘書であった真鍋賢二を立て、勝利をおさめさせてもらったお礼と衆議院在職二十五年表彰の記念講演会をかねての帰郷である。八月の瀬戸内は風も少なく、油照りの暑い日々であったが、大平を迎えた地元は熱狂した。『香川から初の総理大臣を』という、県民の夢が、単なる願望から手のとどく現実になろうとしていたからである。

お国入りのあと、大平幹事長は、宏池会会長就任と、その翌年からの外務、大蔵、党運営など息つく暇もなかつた激務と緊張から解放され、僅かながら休息の時を与えられた。大平はこの機会に、昭和四十五年に出版した『巨暮芥考』以来の演説や講演、提言や随想を一冊の本にまとめることを思い立ち、多くの資料を持つて箱根にこもった。衆議院在職二十五年の記念の一つとするつもりであったが、一つの人生の区切り、身辺整理の一環でもあった。大平は、いわゆる政治家の日記らしいものはつけなかつたが、文章を書くことは嫌いではなく、また自らの心象や感懐を色紙の文字に託すことが多かつた。『花紅柳緑』式の句は百を超えるほど記憶しており、揮毫依頼者の立場や人柄に応じて言葉の贈り物することを忘れなかつた。それでも豊富な読書の中から心に触れる言葉があれば、丹念に手帳に書き留め、たえず名言の補充もしていた。その意味で、色紙にしたためる句は、大平のその時々的心境を如実に物語る記録であつたと言える。能書家で知られた故津島寿一蔵相に教えられたというが、無造作に書きあげるように見えても、ほとんど書き損ずることがなかつたその筆は、堂々たる体軀、一見魁偉な容貌に似ず意外に繊細であり、書体は木簡後期の味わいのある独自の風格を持っていた。この頃よく揮毫した句の中には、次のようなものがある。

山上在 山山幾層（山上に山あり、山幾層）。

波間在 道道縦横（波間に道あり、道縦横）。

真味是 淡至人是常（真味は是れ淡、至人は是れ常）。

不苦去日多只求失日少（去る日の多きを苦しまず、ただ失う日の少なきを求む）。

青年時代に宗教に傾斜していた大平の心には、無限なる神の高みへの憧憬の念と有限なる人間への愛惜の情とが深く刻みつけられていたのであろう。折りにふれて『所詮人間のやることだから……』という感想をもらしているが、完全なものを強く求めながら、それ故にこそ不完全な人間への理解と同情を深めてきた心の遍歴は、大平の人生を貫く主要なモチーフではなかったろうか。

夏休みの前半を箱根で過ごした大平は、後半を軽井沢で休養し、八月三十日には、先に述べたとおり、党主催の第一回「夏季全国研修会」に出席して講演を行った。

在職二十五年記念出版の作業は着々と進み、年末出版にこぎつける目途がついて、題名も『風塵雜俎』と決まった。大平は十一月に行われた三男明と上原吉子との結婚式の引出物を自ら選び、日本地図と世界地図をセットとして参会者に贈った。

同じ頃、大平は『日本経済新聞』から依頼されていた「私の履歴書」の執筆を引き受けた。これは、各界有名人が三十〜四十回程度連載するものであるが、その筆をとる気になつたのは、親しい記者からの強いすすめのほかに、総裁選挙という年を前にして、自分の人生を振り返っておくことも必要だろうという思いが芽生えたためであろう。原稿は、昭和五十三年の元旦から三十回にわたって連載された。

大平はまた、箱根での第一回全国研修会の前後に、秘書の一人に「足もとの明るいうちに政治家の足を洗い、好きな道をやるのだ」と語った。大平の『好きな道』とは、気の合う学者やジャーナリストなどを集めた研究所を主宰することであり、好きな思想や社会問題や外交、歴史に熱中する半ば学究の生活であった。「議員をやめても、ただ家にじっとしているのではつまらないじゃないか。研究所をやつていれば、若い後輩が相談に来てても適切なアドバイスをしてやれるだろう……」、だから研究所をやるつというのである。それは、志に反して実現できなかった、もう一つの大平正芳の人生であった。

また、もう一人の秘書はこの頃、大平から、「郷里の皆さんには長い間お世話になった。何か記念になるようなものを残したい。恩人の加藤藤太郎さんは、加藤奨学財団を残されている。今ある大平文庫を充実させることも一つの案だが、早く考え方をまとめてくれ」と言われ、「政治家としてこれから大仕事をするので、その仕上げが終わってからでよいではありませんか」と答えたが、大平は不満な様子で、その後もしばしば催促した、という。その考え方は、今日、大平正芳記念館を含む財団法人大平正芳記念財団として結実している。

十一月の明の結婚の日から、大平家は大平夫妻だけの家となった。だが、朝は午前七時前から、夜は十一時過ぎまで、よほどのことがない限り、大平邸には幹事長番の記者たちが詰めかけ、情報交換し、自分の家のように振る舞う状態は変わらず、なかなか夫婦二人だけの時間がとれないのが実情であった。しかし、また記者たちに、大平は「僕はどんなに忙しい時でも何とか時間を都合して、少なくとも月に一回は夫婦二人だけで食事をする機会を持つようにしているのだ」とも語っている。大平は妻へのこうした気持ちをも、「ぼくのマドンナ」と題する小文で次のように表明している。大平の人生観、家庭観や私生活観を知る上で貴重な手がかりを与えるものと言えよう。

「……私と妻との生活は、結婚以来四十一年を超えた。それは平穩なものであった。妻も私も平凡な女であり、男である。しかし、マドンナはだれかという設問を前にして、私は私の妻の中に、いくつかの女性のもつ美德というものを感じる。それは貧しいものではあるが、私にとってはかけがえのない貴重なものである。私は、まず妻に一貫して私と子供に対する真剣な献身を感じる。そしてそれは、結婚式の言葉ではないが、「健やかなるときも病めるときも」また「得意のときも失意のときも」変わることはなかった。献身というのは、自分のことより、対象のことを重くみて、その人のために自分の一部ではなく、その全部を捧げるこ

とである。そこには微塵の打算もなければ、見えのかけらも伴わない。

……子供をもつということは、女の大きい負担であるが、同時に大きい誇りでもある。子供を産むことは、女にとって最も手ごたえのある生きがいであり、最も誇り高き役割の一つである、子供をもつた女の姿こそはマドンナの属性の中でも最高のものである。妻も幸いに四人の子供に恵まれた。そんなに健康でもないによく産んでくれたものだ。子供たちも妻に対してよくなついているし、友達としてよく行動を共にしている。その情景は美しい。子供たちもそれぞれ家庭をもつようになり、今では老夫婦だけが取り残された格好になっているが、事あることに妻と子供たちは集まってだんらんする。そしていつも妻がその中心にすわっている。それは彼女にとっては最も得意な時のようであった。

親類、縁者、友人等とのつき合いの大部分は何と言つても妻の仕事である。つき合いの場は人生にとってのオアシスである。そこには相手に対する尊敬と評価も大切であるが、相手に対する奉仕と親切心がなければならぬものである。短い人生で恵まれた機縁は、それがどんなに小さいものであつても大切にしなければならぬものである。人生はそこ以外にはなく、その機縁をどのように大切にしていけるかが、人生そのものであるとも言えるからである。

妻の役割は、この諸々の機縁の結び目を大切に保守し、これに絶えず水をやり、施肥することである。妻はこのことを面倒がらずにやってくれている。社会的地位の高低や、貧富の差などにより態度を変えることなくやってくれている。私は、このことから渴いた世の中に潤いを、騒々しい世の中に平穩を、とげとげしい世の中に和らぎをもたらすが、天が女に期待している大切な役割のように思われてならない……」。

大平は、この年（昭和五十三年）三月十二日に満六十八歳の誕生日を迎えていたが、土曜日の午後、仕事が終わって解放される時、「諸君ともしばしのお別れじゃ」と新聞記者や党職員におどけて見せながら、部屋を出る、学校から解放される小学生のようにつれしそうな大平幹事長は、とてもその年齢とは見えなかつた。